

## 小倉屋酒店沿革

初代小倉屋半右衛門は九州小倉の人で延宝年間（一六七〇年頃）に小倉屋という酒屋を当地にひらいたといわれています。当時の馬場下周辺は榎町の済松寺領地で小旗本の住まいや、三代將軍家光死去のさい、召し放ちになった女中たちが住まったらしい、比丘尼屋敷などがある町だったようです。高田馬場は寛永一三年（一六三七年）にできていて、高田馬場の坂下だから馬場下町といわれ近所に誓閑寺横町、馬場下横町などあったようです。

三角の辻で、私どもの店の記載は馬場下札の辻東角とされています。この、高札場は小さな馬場下一町では費用を賄いきれず、早稲田町、馬場下町、馬場下横町の持ちあいで維持していたようです。江戸城総構築（一六三六年）が竣工し、明暦の大火（明暦三年 一六五七年）で三分の一を焼失した江戸の町が復旧、新しい町が周囲に開かれた頃にあたります。茗荷島や田圃のなかに大名の下屋敷、旗本屋敷やその使用人たちに酒を売っていたと云われます。延宝から元禄にかけては町人文化の勃興期で江戸の人口増加は著しく、また男子多数のいびつな社会であったので酒はかなり売れたようです。当時はまだ居酒屋という商売が成立する以前で自らの住まいで飲まれるのが普通で、異常なほどの量の酒が消費された時代でした。付近一帯は正保三年（一六四六年）から済松寺領地になっていました。

吉村薬局から早稲田実業前をとおり正門通りに抜ける道は昭和三十年代のはじめに開通したもので、それまでは三角の交差点でした。現存している古い写真の店は昭和十年頃、現在の早稲田通りができる際に取り壊された家で、

約百年経っていたと言われています。安政六年（一八五六年）二月の青山の大火にも焼け残り火事の多い当時としては珍しい古い家だったようです。幕末の世情不安と物価上昇のため打ち壊しが発生した際も、ご近所の米屋は被害にあっているが、どうやらうまくきりぬけたようです。夏目漱石が「硝子戸の中」に書いているのはこの頃の事ですが、この強盗にかなり持つて行かれたのが真相です。

堀部安兵衛が高田馬場に駆けつける際、立ち寄ったとされているのは、元禄七年（一六九四年）二代目半右衛門の頃のことです。当時は灘、伊丹から運び込まれる高価な下り酒と地回りの安酒を併売していたので彼が飲んだのは後者のアルコール分の低い酒だったといわれています。安兵衛は当初、中山新五郎といひ越後新発田溝口藩の家臣の息子でした。

現在、新潟県新発田市役所（新発田城址）に父の死後、江戸に向かって出立しようとしている安兵衛の銅像が建っていますが、これは昭和三八年頃、新発田市観光協会がこれにちなんで作ったものです。顔立ちは私も保存の、討ち入り後の安兵衛肖像に似せてあります。

中山新五郎は江戸に出、市ヶ谷加賀屋敷地にすみ、旗本稲生七郎右衛門の中小姓をして、小石川牛天神下の堀内源太左右衛門正春に剣を学んでいた際、知己となった松平左京大夫の家来、菅野六郎左衛門に肉親同様に可愛がられ、義理の叔父甥の盟をむすんでいた。元禄七年（一六九四年）二月一日に菅野は家中の村上兄弟に決闘を申し込まれる。遺恨の原因は分かっていない。六郎左右衛門は家来角田某と

若党一人を伴って高田の馬場に向かったが、妻女に新五郎へ渡す助太刀の依頼状を託した。おなじみの講談「飲兵衛安」だと日本橋八丁堀から駆けつけたことになっているが、実際は牛込軽子坂あたりからと言われている。菅野六郎左衛門は深手を負い帰宅の途中で落命したが新五郎は見事相手方を討ち果たした。この事件を契機に播磨赤穂五万石浅野家家臣堀部家に養子に入り、後に堀部安兵衛と名乗り勇名を馳せた人です。

幕末の頃になると、小金井から牛込に進出していた天然理心流の剣術の免許皆伝をうけたり、ご家人株を手に入れた人もでていきます。慶応二年（一八六六年）には市中打ち壊しが勃発してその被害が四谷、牛込にも及び、早稲田町、馬場下町でも数軒被害をうけたが、我が家は無事切り抜けている。明治から大正にかけての沽券図によれば敷地一五七坪の大店で、後には郵便局も兼営していました。

同じ「硝子の中」に「その代り娘の御北さんの長唄は何度となく聞いた。私は小供だから上手だか下手だかまるで解らなかつたけれども、私の家の玄関から表へ出る敷石の上に立って、通りへでも行こうとすると、御北さんの声が其所から能く聞こえたのである。春の日の午過などに、私は恍惚とした魂を、麗らかな光に包みながら、御北さんのお姿を聴くでもなく聴かぬでもなく、ぼんやり私の家の土蔵の白壁に身をもたせて、佇立んでいた事がある。」と活写しているが、その、お北さんは、私どもの祖母の姉にあたる人です。漱石が半兵衛と書いているのは代々の半右衛門のことです。私の祖父は十四代半右衛門を名乗らず静助でした。

その後、父鶴吉があとを継ぎ、昭和十年前後に夏目坂通り、早稲田通りと二回の道路拡幅で現在の形になりました。昭和十五年の戦時企業整備で酒店をいったん閉じ、酒場や国民酒場を経営、戦後ふたび、小売酒販免許を取得して酒屋を再開いたしました。

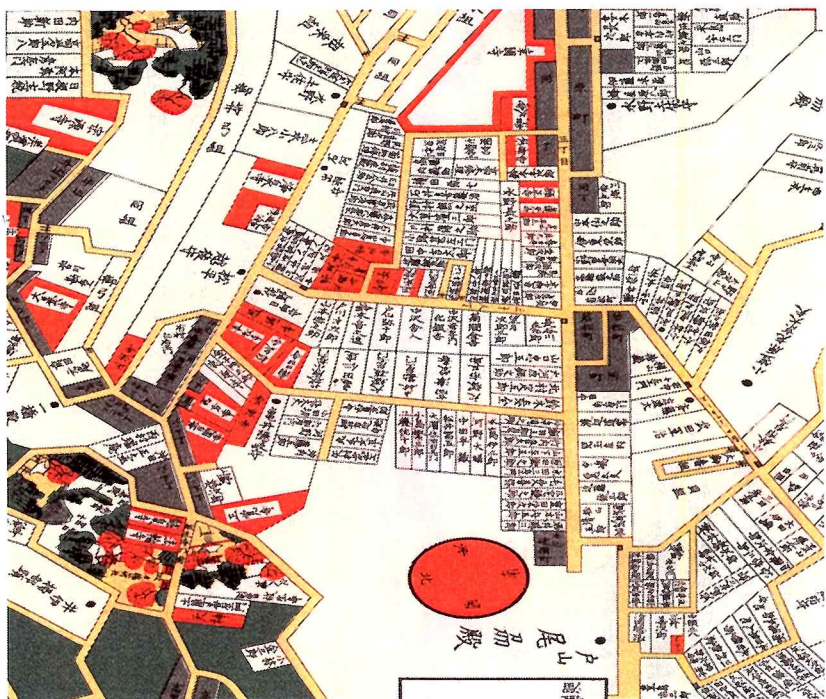
現在、私どもにある堀部弥兵衛、安兵衛親子の肖像は吉良邸討ち入りのあと、泉岳寺で処分まちの間に、弥兵衛の姻戚、能登藩の忠見氏が絵師を同道して描かせたものから、大正年間、祖父が模写させてもらったものです。祖父がお願いした忠見慶造さんの子孫は昭和四十年代にNHKに調べてもらいましたが、わかりませんでした。

他に古い文献では、延宝年間に書かれた、牛込済松寺横町にすむ、伊助という人を雇ったときの年季奉公証文が残っていますが、これは堀部安兵衛とは関係ありません。しかしお仕着せをお四季着せとかいたり、宗旨は代々日蓮宗にしてとか、博打は一切しないとか身元引受人をたてきちんと書かれていて、大変興味深いものです。

昭和三二年、鶴吉は病に倒れ、その後五十年に亡くなりました。現在の店舗は昭和四十八年の建築、フアサードと内装は平成元年春改装したものです。ワインの取扱をはじめたのは昭和三十九年（一九六四年）から太平醸造のサントネージュとキッコーマンのマンズワインが最初です。その後ポチポチ品揃えを始め、ワイン洋酒主体の営業形態を指向したのは昭和五十年（一九六四年）頃からだと思えます。

## 江戸の歴史、早稲田の歴史

今から一二、三万年まえは関東平野は海で、片岩質の原生代岩石からできていて、秩父の山塊を波が洗っていたと考えられています。その後、土地が隆起し、そこに箱根山や富士山の火山灰が降り積もって六万年位前には赤土のローム層に覆われた洪積台地、武蔵野台地ができました。武蔵野台地とは入間川、荒川、多摩川にかこまれた広い地域をいい、このローム層の中から先土器時代（三万年位前）の遺跡が発見されています。その頃は、今の十勝平野くらいの気候で、武蔵野には針葉樹に混じりブナ等の温帯系の樹木が生い茂り、多摩川と利根川は東京湾近くで合流して古東京川となっていました。この頃、海面は今より五、六メートル位高



く、飯田橋付近まで海がきており、旧石器時代に武蔵野に住んでいた人たちはおそらく百人くらいだといわれています。縄文時代になると人々は狩猟や採取をして谷の南側斜面に住むようになりました。紅葉川（今の靖国通り）の四谷側や神田川の川筋などには数千年前から人が住んだとがあると云われています。二千二、三百年前、大陸から北九州に青銅器や鉄器と一緒に稲作が伝わると、東日本にもすぐ伝わりました。大化改新（六四五年）の頃には、地形もほぼ今の形にかたまり、東京、埼玉、神奈川の一部をふくむ地域が中央に確認され、武蔵の国と呼ばれるようになりました。

武蔵野の台地は吉祥寺付近で勾配がゆるくなり、ここから東側を山の手台地といっています。山の手台地は活断層の活動による地殻変動や河川の浸食、堆積によって形を変え、いくつかの台地に別れています。武蔵野東部で最も大きい二つの谷、井の頭池からの神田川の谷と目黒川の谷にはさまれた、山の手台地中央部の台地が淀橋台で、今の渋谷、港区の大部分と新宿、千代田、世田谷区の一部がこの上にあります。古い時代にできた淀橋台は長く浸食作用をうけたために谷がいつぱい入り込み、あちこちに池や低地を作っています。淀橋台中央が麴町台地で、上流が渋谷川と呼ばれて、溜池をとおり江戸湾に流れ込む古川、この南西側が赤坂麻生台地、山中村（今の四谷若宮町）や富塚（戸塚）あたりを水源とする上平川の北東側が牛込台地になっています。牛込台地と本郷台地との間を江戸川が流れ、大曲で大きく南に曲がっている。かつては、ここに白鳥池があり、流れ出した水は飯田橋あたりで上平川と合流、小石川大沼をつくり、ここで分流して、一つは平川として江戸湊に注ぎ、もう一方は不忍池をとおり隅田川と合流していました。江戸湊には台地の間の谷や川がそそぎ沢山の入り江がありました。日比谷入り江はもつとも大きく遠浅で波静かでしたので、海苔が沢山とれました。「日比谷」の地名は海苔をとる

ため海中に竹を編んでいれる「ヒビ」からきていると云われています。この東側の半島状の部分を江戸前島といえます。

京の都の人たちは関東人を東夷あづまえびすと呼んでいましたが、武蔵野を馬でかけ巡り、鹿、狐、狸や鳥を弓矢で追い、犬をつれ牧場をめぐる板東武者は勇猛果敢、武芸に励み神仏を尊び礼節を重んじたといわれています。平安末には牧別当として力をつけ、都から赴任してきた貴人（平氏、源氏）とむすび次第におおきな武士団になっていきました。やがて、鎌倉時代になると、江戸重長という人が武士団をまとめ、麴町台地の東、平川のちかくに「江戸館」をたて、大いに活躍したと伝えられています。室町時代になると江戸は関東管領 上杉定正の支配するところになりました。この人の重臣 太田道灌は江戸館のあとに康正三年（一四五七年）新しく江戸城を作りました。局沢の谷を利用して沢山の堀をほり、子・中・外の三郭を築きました。中城が本丸、子城が二丸、外城が三丸のことです。子・外には倉や厩や櫓がならび、鉄でかためた五つの石門もあって関東一の名城と言われるようになりました。平川の河口には大きな橋がかけられ「高橋」といわれ、港町としてにぎわいました。品川湊しながわみなとと江戸湊えどみなとの間は人家がつづき、湊には国の内外から船が出入りして賑わい、城下町として発展しました。この頃から、江戸前島はずっと鎌倉円覚寺の所領になっていました。硫黄・日本刀や銅や倭寇といわれる武士団までが輸出され、遠く中国からは高価な薬、香木や漆、染料や工芸品が輸入されていたようです。しかし、太田道灌は主人の上杉定正に文明一八年（一四八六年）に殺されてしまい、江戸は淋しい田舎に戻ってしまいました。

それから、百年以上たった天正一八年八月（一五九〇年） 八朔の秋祭りに徳川家康が江戸城に入城

しました。豊臣秀吉が小田原の北条氏の攻略に手柄のあった家康にほうびとして関八州（元 北条氏の領地）を与え、代わりに家康の旧領を取り上げたのです。関八州とは武蔵（東京都・埼玉県）相模（神奈川県）上総（千葉県）安房（千葉県）下総（千葉県・茨城県）常陸（茨城県）上野（群馬県）下野（栃木県）の関東地方全域をいいます。

家康の入城した江戸城は荒れ果て、石垣は一ヶ所もなく、芝土手で建物も山里の民家のように貧弱なものでした。家康は江戸入りに先立ち城下の様子を調べさせ、木原吉次・重次親子に命じて江戸の建設計画を立てさせ、天野三郎兵衛康景を町づくりの総責任者に決めました。まもなく、これを板倉勝重に代え、その配下に普請奉行 福島為基 地割奉行として田上盛重を任命して江戸の町づくりを本格的に始めました。

江戸城を規模の大きな、強固な石垣のある城として築き、平川の河口から江戸城大手門近くまでの道三堀が掘られ、つづいて行徳（千葉県）から塩を運ぶために隅田川の東に小名木川が掘られました。内川回しといわれる海運の発端です。また海岸近くの町づくりなので、井戸を掘っても飲み水は得られません。小石川大沼から水を引いて水道としました。神田上水のはじまりです。また、赤坂の溜池の水も江戸の水道として使われました。

江戸の町は水で苦勞した町でした。当初、赤坂溜池の水を利用しましたが、すぐ底をついてしまいました。小石川の白鳥池、小石川大沼でも足らず、神田上水を引いてきたのです。神田上水は井の頭池が水源で平川の流れを利用、関口に堰を作り、川と上水を分流して小石川大池跡の水戸屋敷まで、解放水路でゆき、

その先は木樋をうめて市中に配水したのです。また、排水にも苦勞しました。上水は遠くから運べても、埋め立て直後の平坦地での排水は大変で、上水との高低差三センチ弱で勾配をとるのは、大変なことでした。埋め立てが築地や八丁堀で止まってしまったのも、そんな事情からでした。動力ポンプのない当時としては当り前のことでした。

城下町は武士が住む武家地の他、寺社地、町人地にわけ、武家地には三河（愛知県）や遠江（静岡県）から移ってきた家臣達が「土衆住居（武家屋敷）」を構え、大手門前の平川河岸をはじめ各地に散在させました。城北（北の丸）から城西の国府口（麹町）の高台に代官の屋敷や役人（番衆）たちの長屋がおかれ、代官町、番町とよばれました。寺社は城下町周辺の交通の要所におき、平川村や局沢にあった寺やお宮は移転させられました。そして最初の町人地は高橋を「常磐橋」と名前をかえて、その東側につくりました。城下町繁栄の本となるので「本町」と名付け、一町を四〇丈（約一二〇メートル）四方に決めました。その中を井の字の形にわけて、道に面した部分に町屋を建てさせ、真ん中に会所地という空き地をつくり、共同の便所やゴミ捨て場にしました。一町四〇丈四方を原則としてつくられた町人地は町奉行によって支配され、町奉行のもとには町人の代表として「町年寄」がつかえ、江戸市中を管理したのです。町年寄には家康の江戸入り（二五九〇年）の際に奈良屋市右衛門、樽藤左衛門が二年後には喜多村弥兵衛が命じられました。

いずれも徳川の旧領地からきた人たちで本町に住まいを貰い「御役所」と称し五ないし八町を支配する

名主を配下に江戸の町を治めたのです。

樽藤左衛門は当初、水野弥吉といったが、三方ヶ原の戦いで戦功をたて、長篠の戦の際、酒樽を陣中見舞いとして信長と家康に贈り、手柄もたてたので樽が通称となり、その後家康のすすめで樽に改姓した人です。その後、家康に随行して江戸入りし町年寄になり、枳座を発足させこれを管理しました。江戸では枳座が枳の大きさを全て監理し、時の奉行の焼き印を押すことで保証しました。

慶長三年（一五九八年）豊臣秀吉がなくなり、慶長五年の天下分け目の関ヶ原の合戦で勝利をおさめた家康は征夷大將軍になつて全国の大名たちを従え、全国を治めるようになりました。それから、家康、秀忠、家光、家綱の四代、七〇年をかけて、江戸城を築き、街を大きくして日本の国の中心を京都から江戸に変えて行くことを始めます。江戸の中心の本町と通町の中心を日本橋として五街道（東海道、中山道、甲州道中、奥州道中、日光道中）の起点として、全国を結びつけるようにしました。江戸の町も渦巻き型に大きくなれるように計画しました。まず、全国の大名たちに命じて江戸に天下一の名城を築くことにし、江戸湊の船着き場をととのえ資材（石や材木）を運び込む用意をしました。神田山を切りくずし、遠浅の日比谷入江をうめたて、その東の鎌倉円覚寺の領地をとりあげてここにも堀を切り開き、平川と結んで、堀川としました。ここに日本橋をかけたのです。現在の日本橋浜町から新橋付近までがそうです。これらの工事は軍役と同じように大名たちに割り当てられました。石高（大名の領地からとれる米の量、一石は約一五〇キログラム）一〇〇〇石に人夫一〇人を出したので「千石夫」といいます。なかには「五百石夫」「百石夫」を志願してだした大名もいたようです。慶長九年（一六〇四年）には

総構築が計画され、豊臣家につかえた外様と呼ばれる大名たち（池田輝政 姫路、福島正則 広島、黒田長政 福岡、加藤清正 熊本）などが工事を命じられました。それぞれ、石を運ぶ船を三〇〇から四〇〇艘を二年がかりで造り、関東には石が少ないので伊豆半島から石を運んだのです。石のほか、木材も必要です。利根川上流の関東北部の山岳地帯や富士川上流（静岡県・長野県）木曾川上流（長野県）から運び出しました。とくに木曾谷の大山林は昔から良質の檜の大材が得られることで有名でした。山で切り出された材木は谷を利用して、ゆるやかな流れに網をはった「網場」に集められて、筏に組まれて流れを下り、伊勢湾まで運びました。長さ三〇メートル、径一・五メートルの巨木などは数千人のわたしが川を堰き止め、堰き止めしながら水の浮力を利用して運び、伊勢湾からは船で引いて江戸湊まで回航したのです。江戸城の石垣を積む所は日比谷入江を埋め立てた所で、重い石垣は沈んでしまい大変な難工事でした。武蔵野の茅をいっぱい敷いて土を盛り、その上で子供たちを遊ばせて時間をかけて踏み固めたとも伝えられています。慶長十一年（一六〇六年）に本丸が完成し將軍（二代 秀忠）が移り住み、明るる年大天守台ができました。日本ではじめて鉛のかわらで屋根を葺いた、地上四八メートルの高層建築物でした。

最初からこのような 江戸城、江戸の町が計画されたわけではありません。必要に応じて最小限の工事が行われ、その結果新しい必要性がうまれて建設が追加されるといふものでした。ふつう、これを次の三期にわけて区別しています。

第一期 家康の江戸入りから幕府を開くまで

天正一八年（一五九〇年）から慶長八年（一六〇三年）まで

第二期 幕府の開設から豊臣家滅亡まで

慶長八年（一六〇三年）から元和元年（一六二五年まで）

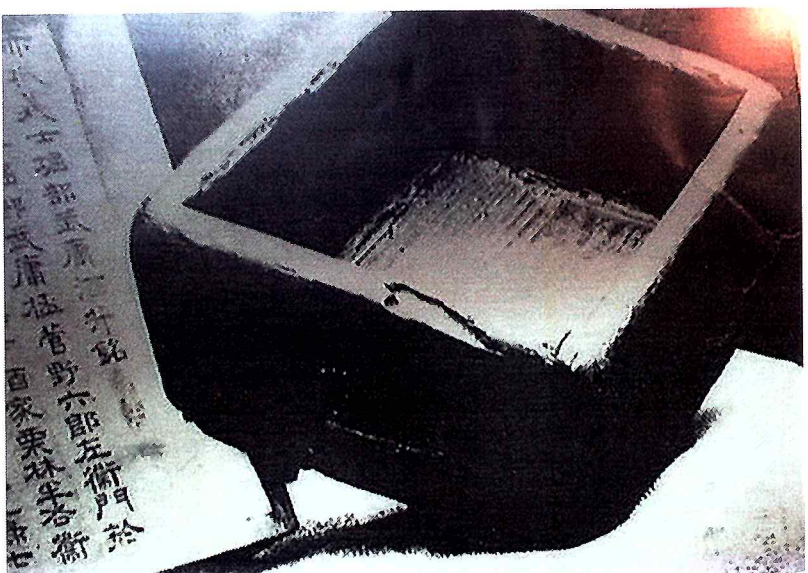
第三期 徳川幕藩体制の確立期

元和元年（一六二五年）から万治三年（一六六〇年）まで

第一期は徳川がまだ、有力大名であった時代で、徳川家の自営工事でした。

第二期は名実ともに天下をとる時期で、これより後は天下普請で参加大名の負担で行われたのです。

その後、江戸城東北部の外堀をつくる工事をはじめました。神田山ののりを掘り崩して、平川の流れを小石川から浅草川につけかえて、隅田川に流す大工事です。元和六年（一六二〇年）に完成しました、大変な工事でした。いままで外堀だった平川大曲<sup>ひらかまおまがり</sup>、飯田橋、九段下、神田橋、日本橋の川筋が内堀となり、小石川、お茶の水、筋違橋、浅草橋の川筋が神田川とよばれ外堀になりました。元和二年（一六一六年）に駿府に隠居していた徳川家康が亡くなると、家康に仕えていた沢山の人たちが江戸に戻ることになりました。この人達の住まう場所をつくり、同時に本町周辺の町人地は、暴れ川といわれた平川の洪水に悩まされることがないように計画したのでした。この後、神田山の跡地は駿河台と呼ばれるようになりま



した。承応三年（一六五四年）に浅草川から牛込まで通じ、仙台藩の手で拡張工事が行われて万治三年（一六六〇年）牛込門まで船が入れるようになった。これによって、江戸東北部の物の流れの基地が神楽河岸として出来上がったのです。これより二〇年ほど前、高田馬場が作られ、この地にあった八幡宮を守護神としました。寛永一八年（一六四一年）別当寺の工事中に南の山裾に横穴がみつかり、中から金銅の阿弥陀如来があらわれた。依頼「穴八幡宮」と称するようになりました。慶安元年（一六四八年）前田利常以下の諸侯や旗本の寄進により、本社以下を建立、翌年遷宮式がおこなわれました。東照宮も勧請、この際將軍家より將軍家綱着用の御具足一領の御寄進があり、將軍家祈願所になりました。内陣の扉の金具に葵の紋が使われているのは、これ以来のことではないかといわれています。

この頃、牛込三十余町は大橋隆慶という人の知行地でした。関ヶ原の役で片桐且元の部下として戦い傷を負い、召し出されて家光に仕えた人です。知行は五百石といわれ、牛込西部、下戸塚、高田と広がったようです。

大橋隆慶の名前は神田川にかかる橋として今ものこり、穴八幡神社の社殿建立に功績のあった人で石布袋手水鉢は彼の世話で四代將軍の寄贈だと伝えられています。大橋隆慶のまへは天友宗麟の子孫の義親の知行地でした。跡継ぎがないため、知行地が大橋家変わったのです。そのため、牛込には隠れキリシタンがいたとの伝説もあります。

大橋龍慶が亡くなった後、牛込の地は返納され、改めて家光に仕えて大奥で才覚をふるった祖心尼に家光秘蔵の仏像とともにこの土地を与え、寺を建立するように命じました。蔭涼山濟松寺、境内一万坪

余り、寺領は牛込に三百四十五石、雑司ヶ谷に二十石の寺です。（牛込榎町に現存、山門や伽藍の瓦に葵の紋をもちい、徳川家との関係の深さがわかります。済松寺代官とよばれる役人もいる、門前両替商もある、上野寛永寺、芝増上寺にならぶ寺院になつて行きます。）

慶安年間に調べられた「武蔵田園簿」によると牛込村の高四七・石五斗余、その知行は、祖心知行、宗参寺領、行元寺領となつている。中里村、早稲田村はない。当時はまだ牛込村の字にすぎなかったようだ。明治に入って調べられた「田高田領取調帳」では、牛込村 伝通院領 二五石余、済松寺領 四二石余、宗参寺領 八石余、早稲田村 済松寺領 九七石余とあり、はつきりわかれて書かれています。

このあたり（馬場下町）は寛永一三年（一六三六年）にできた高田馬場の東にあり、八幡坂下にあるので馬場下といわれ、済松寺領になったのは正保二年（一六四五年）には家持家主三三軒、地借店借あわせて八五軒あつたと伝えられています。平川といわれた神田川の汐入の最終地の関口から近く、その水を利用して米作りのできる一番はずれの地でした。はじめ、田園地帯として開かれ、早稲田田圃と呼ばれましたが、江戸が大きくなるにつれ、町屋や武家地が増えてきたのです。神田上水は井の頭池を源に平川の流れを利用して関口に堰を作り、神田川を分流して小石川池跡の水戸屋敷まで開放水路でゆき、その先は木樋をうめて江戸の市中に配水したのです。上水は遠くから運んでも、埋め立て直後の平坦地では排水は大変で上水との高差三センチ弱を確保しながら、勾配をつけるには大変な苦勞をしたようです。田圃の跡の湿地に建物を建てるのも大変でした。樽地形たるまがたといった基礎工事も用いられたようです。

ご高札場もありました。このご高札場は小さな馬場下町一町ではその費用を賄いきれず、早稲田町、馬場下町、馬場下横町の持ち合いで維持していたようです。

早稲田高等学校の校舎建て替えの際、江戸期の遺跡が発掘調査されました。蟹川沿いの湿地に建てるのに苦勞したのでしょうか。樽地形で基礎を固め商家の土蔵を建てた建物跡が発掘されています。

明暦の大火で江戸の三分の一が焼失した町が復旧され、新しい町が周囲に開かれた頃、私どもの初代が馬場下に店を開きました。延宝六年（一六七八年）でした。

江戸の田園地帯が急速に市街化して行く頃のことです。江戸湾から飯田橋まで船がはいるようになって飯田堀周辺が埼玉方面への物流の拠点になりつつある頃でした。

江戸の町は家康の入国以来ずっと建設工事でごった返していました。工場で働く荒くれ男や国元からでてきた侍や商人たちはみんな男で、女性の数がきわめて少ない特異な町でした。また、殺風景なほこりっぽい町なので、早くから銭湯がで繁盛したり、異常に男性の多い社会のなかで夜間外出もできず、お酒が沢山飲まれた時代でした。私どもでは大名の下屋敷、抱屋敷、小旗本

や、その使用人達に灘から回船で運ばれた上等なお酒や地回りの安酒を売っていたようです。在番とも云われる勤番侍（参勤交代で殿様についてきた武士）は勤務はたいいて三日か四日に一度、あとは殿様がお城に上がる日のお供くらいで、暇な勤めだったようです。切絵図を片手に江戸見物、札所



めぐり、観音参りに歩いたようだ。しかし門限は暮れ六つ（午後六時）だったから夜がながく、男所帯だから酒が沢山飲まれたのです。江戸の庶民のたのしみも、梅見、桜、摘み草、月見、滝浴び、虫聞き、紅葉見、雪見など四季の楽しみだったようで、船遊び芝居見物などは金持ちの贅沢でした。お祭りにも熱中し、縁日の寺社参りもさかんで、持参の弁当や酒を飲むのが楽しみでした。江戸とはいえ、食べ物屋もなく、旅にできれば宿では自炊だった時代で一串三文の田楽の辻売りがでたり、蕎麦が流行するのは元禄に入ってからになります。

灌漑技術の向上、肥料の改良などで農業生産が増大し、城下町の建設が全国でほぼ終わり、大名にかえられた武士達は地方知行制（領地の支配権がある）から蔵米制に変わりつつあり、貨幣経済が浸透して商品流通で生計をたてる町人の生活が急上昇したところです。堀部安兵衛が高田馬場に駆けつける際、立ち寄った云われているのは元禄七年（一六九四年）二代目半右衛門の時のことです。地廻りのアルコール分の低い安酒を景気づけと腹ふさぎをかねて呑んだとされています。堀部安兵衛は、当初中山新五郎といい、越後新発田、溝口藩の家臣の息子でした。

享保一三年（一七二八年）幕府は小笠原貞政に命じて徳川家重の世継の疱瘡治療祈願の「流鏑馬」を奉納し、十年後祈願成就の報賽としてふたたび行われ、これをきっかけに將軍家の厄よけ、誕生祈願などに流鏑馬が行われるようになりました。

元文三年（一七三九年）私どもでは牛込榎町にすむ伊助という人を雇っています。年季奉公の証文と

も云うべき「差上申御請状之事」が残っています。生国、檀那寺、宗旨や公儀の法度、作法、人請、勝負事の禁止をまもること、給金、待遇まで明記されたものです。小倉屋も開業以来六〇年ほどたち組織として確立されつつある時期だったのでしょう。

浅間山の噴火や天候不順で天明の飢饉（一七八二年）がおき、農村では百姓一揆、江戸では打ち壊しが横行したが、幸いこの地域は大過なくすごせたようだ。

文政十年（一八二七年）の町方書上によると

牛込馬場下町	町内総家数	一一七軒	うち	家持家主	三二軒	地借	一軒
	店借	八一軒	明店	三軒			
また牛込正覚寺前	町内総家数	五軒	うち	家守	一軒		
	店借	三軒	明店	一軒			
牛込放生寺前	町内総家数	一五軒	うち	家持家主	八軒		
	店借	七軒					

になっています。ここまでが、江戸御府内で町奉行所の支配をうけておりました。現在の馬場下町四二番地の部分は武家地（当時は旗本増井伝之丞の抱屋敷）で除外されておりました。その後正覚寺の門前には山田浅右衛門（吉田松陰を斬首した）が住み、門前には「永代常念 仏供養塔」があったと言われております。

嘉永二年（一八五三年）ペリーの黒船来航で江戸中は大騒ぎになり、あわてた幕府は火薬の増産をはじめ、牛込でも始まりました。百姓農民を動員、水車を使用した規模の大きなものでした。矢来下の水車爆発事故がおき、淀橋でも大爆発がおきています。この頃、武州小金井から天然理心流が牛込に進出してきて、牛込柳町に道場を開きました。我が家にも道場に通り、免許皆伝をうけた人がおり皆伝書は現存しております。安政二年（一八五五年）の大地震は大曲周辺では、地盤の関係でかなりの被害がでて、漢学者の藤田東湖がなくなっています。慶應二年（一八五三年）に幕末の世情不安と物価上昇のため、またまた打ち壊しが流行、馬場下では米屋さんが被害にあっています。浪士強盗もあり、家でも被害にあっています。夏目漱石が「硝子戸の中」にいろいろ書いておりますが、史実は当店でもかなりの被害だったそうです。こうして徳川体制は崩壊して行くのですが、江戸の人達は終始、徳川最良でした。「うえさま」「カモンサマ」という話方をするお年寄り、この間までアチコチにおられました。